ふるさとを胸に

内陸からの再起 ㉔

一関・藤沢の宿舎で生活　佐藤　さき江さん（気仙沼市から避難）

気仙沼市から昨年5月、一関市藤沢町の雇用促進住宅藤沢宿舎に移り住んだ佐藤さき江さん(56)は、同宿舎の自治組織「結いの会」会長を務める。

宿舎は昨年3月の東日本大震災で被災した気仙沼市や宮城県南三陸町、陸前高田市、大船渡市などからの避難者を中心に約50世帯110人が暮らす。「住民は長く付き合っていく家族」と、物資の分配や地元住民との交流会など入居者の住みよい環境づくりを進める。

問題が噴出

佐藤さんは津波で気仙沼市内の脇の自宅を流され、地元小学校に避難。プライバシーがなく、食事もままならない避難所を離れ、藤沢に身を寄せた。

気仙沼と藤沢は、古くからつながりが深い。同住宅に移住した避難者には食料や物資、交流の催しなど、住民の惜しみない支援が続いている。

生活するうちに、路上駐車やごみの分別などの問題が噴出。草刈りなどの行事に顔を出す人も少なかった。「支援物資の分配も行政任せの状態。誰かがまとめなければ」と自治組織の必要性を痛感し、7月に班長会を立ち上げた。

班長は女性ばかりで手探りのスタートだったが、合併前の旧藤沢町役場や周囲へのあいさつ回り、入居状況の把握やトラブル解決に取り組んだ。

考え方が違う人と衝突することもあったが話し合いを重ね、一つ一つ課題を乗り越えた。「辞めようと考えたこともあったが、これまで支えてくれた藤沢の人たちに申し訳ない」と奮起した。

宿舎に届いた寄付金の一部で、10月に「復興・感謝の会」を開いた。お世話になった地元住民やボランティア団体、町職員ら約40人を集会所に招待。壁には各団体の支援を紹介する手作りの資料や写真を飾り、豚汁やおにぎりを振る舞った。感謝の気持ちに満ちあふれた会。入居者と支援者、地元住民との絆は着実に深まった。

実態知って

感謝の会には気仙沼市職員も出席し、藤沢宿舎を市の仮設住宅の一つとして支援することを約束。気仙沼からの避難者と市のパイプを築く契機にもなった。避難住民の把握が難しく、自治体からの支援の手が届きづらいとされる「みなし仮設」にあって、佐藤さんは何度も市に出向き支援を働きかけた。

「古里とつながれば住民は我慢できる。地元の情報もほしい。行政には避難者全体の実態を知ってほしい」と求める一方で「避難者から発信すれば物資もボランティアも来る」と訴える。

行政の支援を受けるため規約のある自治組織が必要となり、他団体との交流も視野に入れた「結いの会」を12月に結成。現在は贈られたミシンなどを使って洋裁や編み物、ペーパークラフトなどに取り組み、販売も目指す。

「藤沢に来たのは水の流れのよう。いつか入居者はばらばらになるが、培ったつながりを大切にしたい。藤沢で過ごした時間を良い思い出として振り返ることができたらいい」と願う。結いの心で築いた藤沢での生活。第二の古里で、未来を描く。

（文・写真、鈴木弘樹）

支援団体から贈られたミシンで洋裁をする佐藤さき江さん（左から２人目）と班長の女性たち。結いの心で住民をつなぐ＝一関市藤沢町の雇用促進住宅藤沢宿舎

「復興・感謝の会」で、お世話になった団体・個人を紹介する佐藤さき江さん（左）＝2011年10月30日

将来は交流持ちたい

応援メッセージ

気仙沼市上田中反松(そりまつ)公園住宅自治会副会長
菊田　雅晴さん(61)

佐藤さき江さんとは避難先の小学校で初めて会った。しっかりした人で互いに班長を務め、物資の受け渡しや炊き出しの準備などを行った。避難所はプライバシーもなく、住民同士の衝突もあり大変だったが、その経験を生かして藤沢でも頑張ってくれるだろう。仮設住宅は、とにかく誰かが先頭に立たなければまとまらない。住民が声を出さなければ、行政に要望が届かないのが現状だ。結いの会は女性の力でまとまっている。将来は交流を持ちたい。人のつながりを大切に復興を目指す。

状況と結いの会への問い合わせ

一関市によると、1月1日現在、市内6地域の雇用促進住宅に計254世帯620人が入居。仮設住宅に移る世帯がある一方、震災で倒壊住宅の建て替えなどに伴う一時的な入居や福島県からの入居者もあるという。結いの会への問い合わせは佐藤さき江会長（080・6028・8135）へ。

いわて　東日本大震災

被災者らの自立応援

生活再建機構が発足
電話相談の拠点設置へ
盛岡で会見　設立総会

「生活再建支援機構いわて」の設立趣旨を確認する関係者

東日本大震災の被災者ら生活困窮者を支援する生活再建支援機構いわて（代表理事・石橋乙秀弁護士）の設立総会は30日、盛岡市大通1丁目の岩手教育会館で開かれた。3月に予定する生活相談のための拠点設置を手始めに、生活困窮者を孤立させず社会とつなぐための活動を展開していく。

盛岡市のNPO法人など3団体と1個人で組織。10人が出席し、吉田直美事務局長が「被災者を含む生活困窮者に寄り添い、制度横断型の生活再建支援を行う」とする設立趣旨書を読み上げ、承認された。

コールセンターは3月1日、同市南大通1丁目のCFCビル内に開設。「寄り添いホットライン」として全県からの電話相談に応じる。相談を受ける人員や態勢などは今後決める。

被災地で継続的な支援が必要なケースは、2012年度から久慈、宮古、釜石、大船渡の4市に県が新設するパーソナル・サポート・サービスの事業所「これからのくらし仕事支援室」を紹介し、行政窓口まで同行するなどの支援につなげる。

同機構として、ほかにも国や県からの困窮者支援事業の受託を目指す。

石橋代表理事は「さまざまな支援制度はあるが、支援者目線の縦割りでは意味がない。困窮者をトータルでとらえる支援のシステムが必要で、被災者だけでなく全県民を支援の対象としたい」と意欲を高めている。

熊本県PRキャラ　県に538万円を寄付
学び基金に積み立て

熊本県の「営業部長」を務めるPRキャラクター「くまモン」が30日来県し、東日本大震災で被災した子どもたちの支援に役立ててもらおうと寄付金538万1千円を本県に贈った。

くまモンと熊本県の関係者らが県庁を訪問。寄付金の目録を受け取った上野善晴副知事は「厚意を受け止め、しっかり復興を進められるよう取り組む」と述べ握手を交わした。

寄付金は熊本県民や企業・団体から寄せられた「くまモン募金」の一部で、いわての学び希望基金に積み立てられる予定。くまモン募金には「子どもたちが元気に明るく過ごせるよう使ってほしい」との願いが込められた。

上野善晴副知事に寄付金を手渡す「くまモン」

くまモンは九州新幹線全線開業に合わせて誕生。「ゆるキャラグランプリ2011」では国内外349体の中から1位に選ばれている。

田老地区、一部移転に
宮古の検討会　まちづくり案を決定

宮古市の「地区復興まちづくり計画」検討会の最終回となる第4回会合が30日、同市田老地区を皮切りにスタートした。同地区の計画案は、津波で浸水した区域の住民だけが高台に移転する「一部移転案」を採用することが決まった。

委員21人が出席。素案段階では、一部移転案と、被災していない住宅も一緒に高台に移転する全戸移転案を「両論併記」していたが、一部移転案に一本化する形で修正。その上で、被災を免れた住宅世帯も将来的に安全な高台へ移転できるようなまちづくりの仕組みを検討することを付け加えた。

決定前の意見交換では、今月14～17日に行われた素案の内覧会などで「高台移転を希望する声が圧倒的に多かった」などとする委員もいたが、被災を免れた住宅の移転に制度的な支援がないことなどが一部移転案にまとまる主因となった。

計画案は海側の防潮堤が14・7㍍に整備されるとの前提。素案で国道45号から山側一帯をかさ上げするとした宅地は、市側が行った個別意向調査などを踏まえ、宅地を集約して一部をかさ上げする方向でまとまった。

田老地区復興まちづくり計画案は2月18日、同地区全住民を対象に開く拡大会合に諮り、市長に提言する。

復興願い市街地模型
宮古工高生　市に寄贈　4カ月かけ製作

宮古市赤前の宮古工高（藤原斉校長、生徒253人）の機械科津波模型班の3年生6人は30日、震災発生前の市街地を再現した立体模型を市に贈った。まちの早期復興を願い約4カ月間かけて、ベニヤ板や紙粘土で完成させた労作。市は被災を後世に伝える貴重な資料として、同市本町の市役所分庁舎玄関付近に当面展示する。

模型は縮尺約6000分の1で、面積は約3・2平方㍍。コバルトブルーの宮古湾、崎鍬ケ崎地区から津軽石地区までの市街地を一覧できる。

君沢健吾君、佐々木琢哉君、佐々木遼馬君、佐藤宇晃君、久坂拓磨君、横田恭一君の6人で作った。同班は代々、小学校などで啓発授業を行うため「津波模型」を作ってきたが、今回は元の街並みの模型に変更した。10月から、授業のほか休日や放課後を利用して製作に没頭した。

同分庁舎で行われた贈呈式で、6人は名越一郎副市長らに解説し「ベニヤ板を切るのが大変だった」などと振り返った。久坂君は「災害に強いまちをつくるために役立ててくれれば」と強調した。

同校は市内の高校で唯一、校舎が被災し、8月までは1、3年生が宮古水産高、2年生が宮古商高に間借りして授業を受けた。自宅が被災した佐藤君は「模型は飾るだけでなく、まちづくりに生かしてほしい」と願い、横田君は「市内に就職するので復興を担う一人として、任された仕事を頑張る」と今後への決意をにじませた。

復興への願いを込め製作した立体模型について説明する宮古工高の生徒＝宮古市役所分庁舎

津波てんでんこ

題字・山下文男さん

～被災者からのメッセージ～

笑顔が戻ってほしい

田野畑村北山
平坂　瞳子さん（田野畑小5年）

津波が起こるのはしょうがないけれど、犠牲者が出ないような安全な村になってほしい。祖父が自然遊歩道の案内人をやっていて、たまにアワビ漁に出ていた。今は漁ができないけれど、漁業が復活してほしい。田野畑は海や自然がきれい。村の人たちの笑顔が戻ってほしい。大人になっても、田野畑が大好きです。

防災へ堤防高くして

大槌町小鎚
森田皐太郎君（大槌小4年）

地震が起きた後は先生の呼び掛けで校庭に出た。校庭が地割れしていたので、さらに高台の公園にみんなで走って逃げた。高台から津波がまちに迫ってくるのが見えてすごく怖かったので、堤防を高くして、もう津波が来ない町をつくってほしい。仮設住宅で暮らす祖父母が早く普通の家で暮らせるようになってほしい。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。